

武生・芦山公園 と 造園家・本多静六*

— 福井県近代公園史に関する一考察 —

市川 秀和^{*1}, 平野 忍^{*2}

ROZAN-Park in Takefu and Landscape-architect Dr. Seiroku Honda A Study on History of Modern-Park in Fukui Prefecture

Hidekazu ICHIKAWA^{*1} and Jin HIRANO^{*2}

^{*1} Faculty of Engineering, Department of Architecture and Civil Engineering

^{*2} Keifuku-Consultant Co.,Ltd.

Japanese Modern-Park (or Public Garden) was an important element of Urban-equipment in Modernization-process. Dr. Seiroku Honda (1866~1952) was a famous landscape-architect and a professor in Tokyo-University before World War II. In Fukui Prefecture, Honda's only work is "ROZAN-Park" in Takefu (Echizen-city). The name ROZAN is one of Murakuni Hill (238.9m) on Hinogawa river. In this paper, we tried to make clear Honda's modern design-concept and drawing of the Park of important infrastructure in Takefu area.

Key Words : Ozan-Park, Seiroku Honda, Takefu, Murakuni-Mountain, History of Modern-Park

1. はじめに —福井県の近代公園について—

日本近代の都市形成史における「公園 Public Garden/Park」の持つ歴史的意義は、日本初の洋風公園と称讃される東京の「日比谷公園」(開園:1903、設計・本多静六:Fig.1)を好例に、大都市を中心に多くの研究成果が積み重ねられてきたものの⁽¹⁾、地方都市の事例は未だ少ないのが実情である。かかる課題に対して20年程前から北陸地域の近代公園の成立に関する調査研究を継続しており、福井県内では足羽山公園と西山公園(ともに設計・長岡安平:Fig.2)の成果をまとめた⁽²⁾。さらに東京都公園協会の「長岡安平史料群」⁽³⁾の整理作業が近年進められた結果、福井県内の長岡の設計が新たに判明した(Table1)。さらに本多静六が、越前市武生の芦山公園を設計していたことを合せると、この2人の造園家は「福井県近代公園史」を考える上で極めて重要である。そこで本稿は、本多静六による芦山公園・設計書の読解を主な目的とし、今後の現地調査のため若干の考察を行う⁽⁴⁾。



Fig.1 本多静六 (1866~1952) Fig.2 長岡安平 (1842~1925)

Table1 福井県内の主な近代公園

本多静六の設計

越前市: 芦山公園 (1925)

長岡安平の設計

福井市: 足羽山公園 (1908) 三秀園 (1909)

鯖江市: 西山公園 (1909)

敦賀市: 松原公園 (1919)

* 原稿受付 2020年5月29日

^{*1} 工学部 建築土木工学科

^{*2} 京福コンサルタント株式会社・建築設計室 (2019年度・大学院科目等履修生)
E-mail: hidei@fukui-ut.ac.jp

2. 武生の近代化と「芦山公園」(村国山)

現在の「芦山公園」を含む「村国山 238.9m」は、越前市・武生中心部より見て「日野川」を挟む東側に位置しており、その特徴的な山容は「日野山」を背景にして市街地からも良く眺めることが出来る (Fig. 3). このような村国山のトポグラフィを踏まえ、当公園の成立した大正 14 年前後の背景を振り返っておきたい⁽⁵⁾.

明治 22 年 (1889) の市制・町村制公布により「武生町」(人口 12,937 人) が誕生し、続く明治 29 年に北陸本線の鉄道が開通して現在地に「武生駅」が新設されるなど、江戸の城下町の風情溢れる中心部が徐々に近代化へ向けて進み始めた。さらに大正 3 年に「武岡鉄道」(のちの南越線)、そして大正 13 年に「福武鉄道」(のちの福武線) が開通するにともない、武生町の近代化による新しい都市の公共施設 (図書館・公園・公会堂など) が続々と着工し、さらに「市制」への要望が高まった。

こうした大正末期から昭和初期に至る武生町の近代化に最も貢献した人物の一人が、蚊帳製造を営む「山本甚右衛門」(1868~1951: 6 代目・山本甚三郎, 山甚産業) であり、大正 11 年 (1922) に「町立図書館」の建設費を寄付した (翌年開館)。またその直後の大正 12 年 9 月の関東大震災を機に、村国山の興禅寺 (曹洞宗) から北東部一帯の土地を買い受けて大正 13 年 2 月に武生町へ寄付し、「公園」新設へ向けて活動を始めた。まず山本は、国家泰平と衆民幸福を願って「白衣観音像 (芦山観音)」を公園計画地内に大正 14 年 10 月に設置することによって、公園整備は不十分であったものの「芦山公園」開設への辿りついた。この時点で公園設計を依頼した本多静六の設計図は未だ作成中であったものの、この直後の大正 14 年 12 月には本多の設計図が完成して公園内の整備はいっそう進められ、昭和 3 年に「公会堂」(現存) の竣工とともに、公園の正式な完成を見たと考えられる。

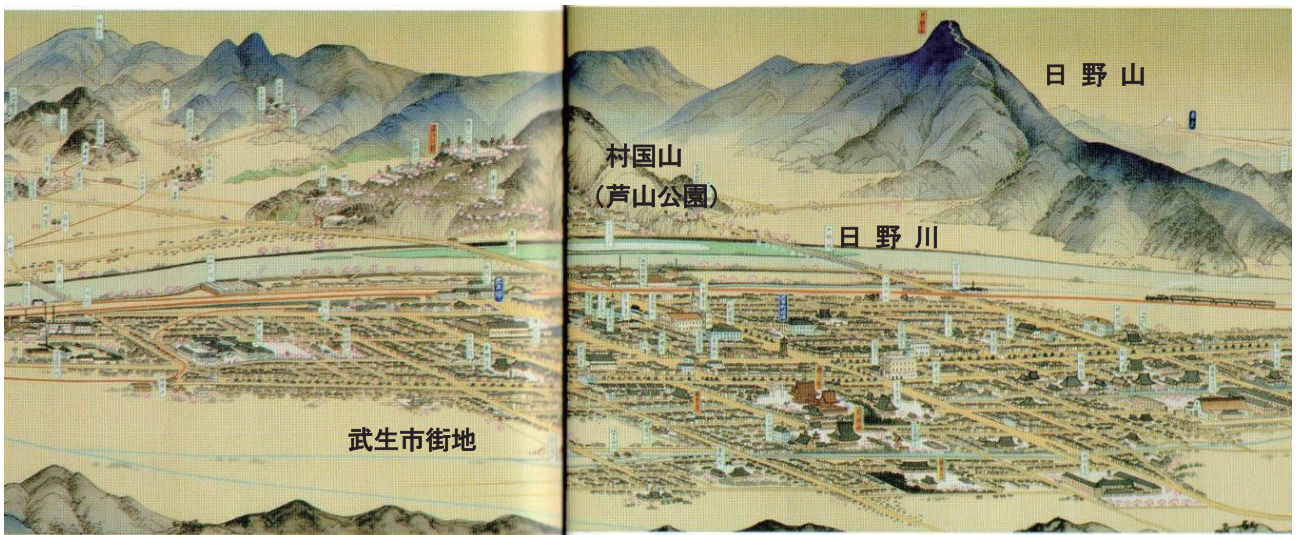


Fig. 3 描かれた武生市街から村国山、日野山に向けての鳥瞰図 (昭和 8 年、文字加筆)

3. 造園家・本多静六について

本多静六 (旧姓・折原) は、慶応 2 年 (1866) に現在の埼玉県久喜市菖蒲町にて豪農の折原家の第六子として生まれ、農作業を手伝いつつ勉学に励んだ⁽⁶⁾。明治 13 年に 14 歳となった折原静六は、東京で書生を始めつつ、明治 17 年には東京山林学校へ入学して優等生となって注目されると、教官の知人の本多家から強い婿養子の申し入れがあって「本多静六」となったのである。明治 23 年に卒業するとドイツ留学へ旅立ち、ターラント高等山林学校を経て、ミュンヘン大学よりドクトル (博士) を得るまでになった。明治 25 年に帰国して東京帝国大学農科大学助教授に就き、まず「造林学者」として出発したが、その後は造林・造園・都市計画などで活躍した。

特に日本初の洋風公園の「日比谷公園」(明治 36 年) を設計したことから「造園家」として知られ、日本近代公園のパイオニアとなった。これもドイツ留学の成果の一つであるが、これ以後、北海道から九州までの全国各地の公園設計に携わり、その公園観とは、自然への回帰と自然環境の調和を根本としたものであった。

4. 本多静六著『福井縣武生蘆山公園 設計圖及説明書』（1925）について

『福井縣武生蘆山公園 設計圖及説明書』（以下、『設計図及説明書』と略す）は、全 19 頁の本論に巻頭写真と設計図が付いた小冊子である。本論の内容は、「緒言・前論・本論・結び」の四構成になっている（Fig. 4）。なお便宜的に二つに大別（「緒言・前論」「本論・結び」）して読解し、若干の考察も試みたい。また、本多の助手・池邊武人が併記されているが、池邊は現地調査ならびに図面作成の補助を担当したと思われるので、本論は全て本多による執筆と考えてよいであろう。

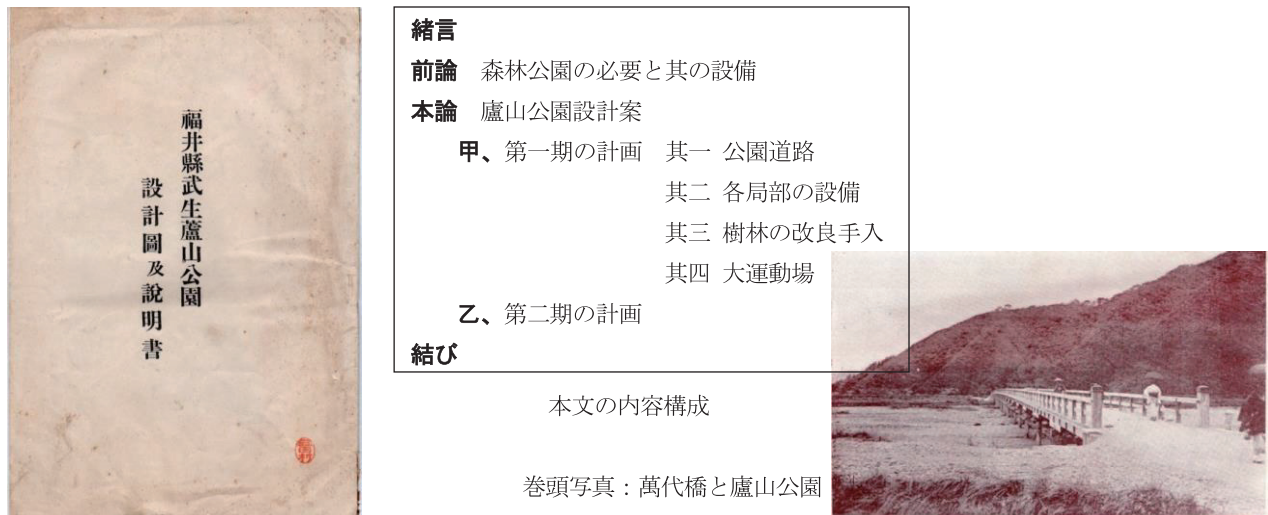


Fig. 4 『設計図及説明書』原本 と その内容構成

4.1 「緒言・前論」について

まず緒言では、設計依頼者である武生町長と助役、そして山本甚三郎らの案内から現地視察した経緯が記されるとともに、その現地調査が十分でないため、大よその設計概要を示すに過ぎないと前置きしている。

続く前論（森林公園の必要とその設備）の主旨は、本多の基本的な公園論の論述である。近代機械産業の発達が人間の健康と自然環境に危機を及ぼし、文化的な生活と健康のためには野外生活・運動などが不可欠であるから、従って市街地周辺の森林を公園利用することが重要なのであり、「森林公園」が必要である所以を説いている。

では具体的に「森林公園の森林は如何に取り扱われるべきか」の課題について、森林風致・風景美を助長する樹種（サクラ・カエデなど）をスギ林等に混植し、森林風景が単調に陥らないように施業するのが原則という。ただ森林公園内に存する道路や建物の外は、一切人為を加えないように、つまり自然の様相を出来る限り発揮させることを尊重している。

また公園内の「道路」には、散歩道や人力車道、馬道、自動車道、橋などがあるが、従来の公園設計では道路を強いて直線となすことがあり、これは禁物であると指摘する。むしろ公園地にあつては道路を自然の地勢に応じて曲線に造る方が良くとする。さらに道路の両側では、樹木を伐採して赤土が露出するまで掘り起こす悪い例があり、「美しき下木と下草のみ残す」ことが公園林らしく好ましいと論じる。そして森林風景の様な見え方は面白くなく、天然の地勢や方向を考慮した適切な樹種林相を形成する森林美の施業が必要であると強調した。

そのほか眺望場所の「腰掛（ベンチ）」は、倒木や古木を運んで自然らしく置き、ペンキ使用は禁物とし、その根拠にフランスの哲学者ルソーを引用しつつ、「案内板」「茶屋」等の設置についても同様に説いている。

4.2 「本論・結び」について

本論の冒頭では、芦山公園の立地条件として、武生町の東方の日野川を隔てた村国山の北半部に位置していると説明し、別称「村国山公園」とも紹介している。さらに村国山の山中には長蘆山・興禅寺（曹洞宗）等の社寺が林内に点在し、山岳地の地勢や眺望等が本公園の特徴となることが述べられている。

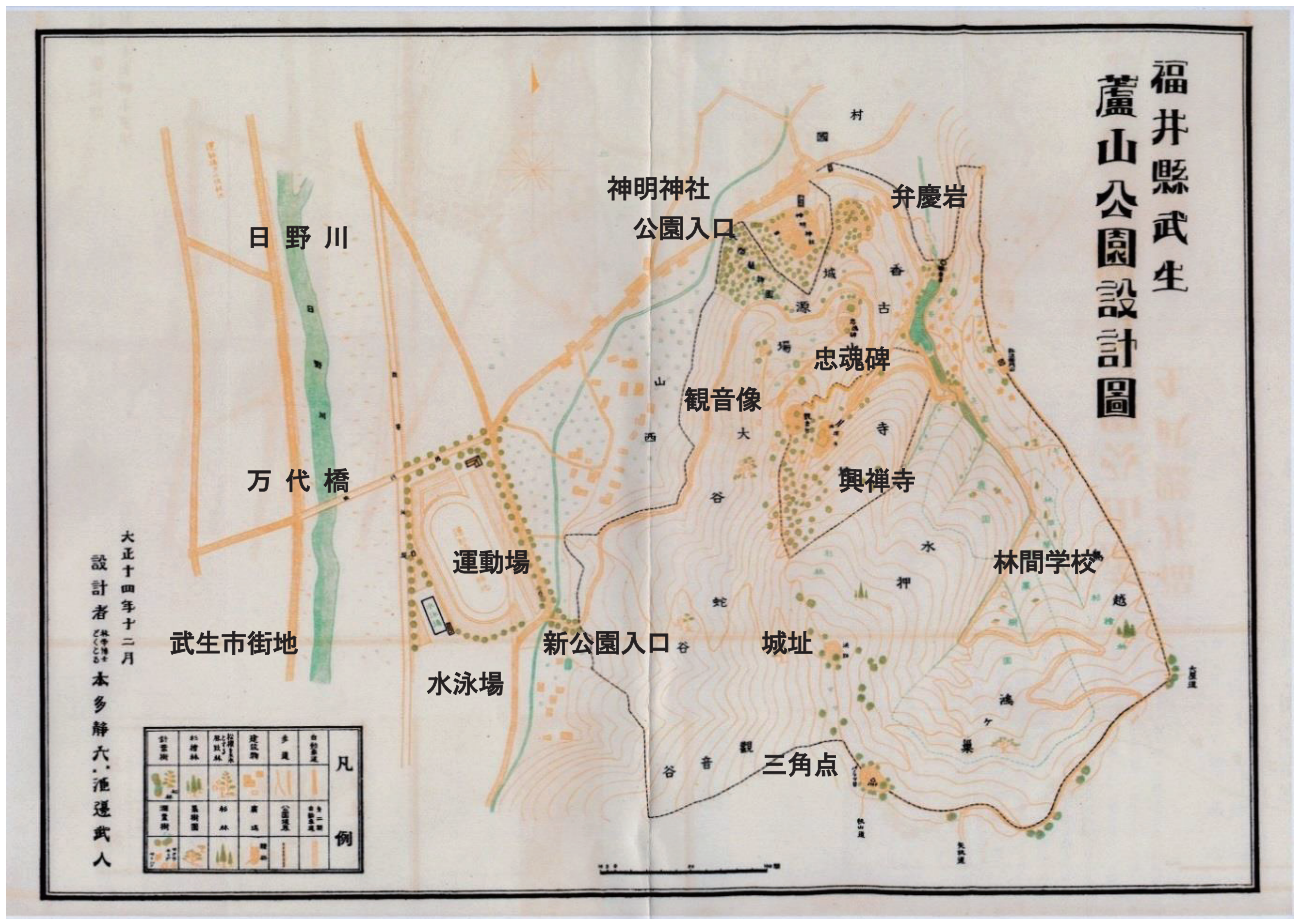


Fig. 5 「福井縣武生蘆山公園設計圖」(本文説明内容より文字加筆)

甲、第一期の計画 (Fig. 5 参照)

①公園道路

本公園内の道路を「自動車大回遊線」と「散歩道」に大別して、相互に交差連絡して全体の廻遊性を造り出す計画が意図されている。具体的に幾つか事例を挙げるならば、まず神明神社側「公園入口」から興禅寺前に至る「本道」を改築して「自動車道」とする。さらに計画中の神社裏の「見晴台」から「忠魂碑」を経て「観音像」に至り、「興禅寺」へと繋がる「山道」を緩やかな勾配に改築し、その道の両側には、多数のヤマザクラを植えて「並木道」を形成する。

また公園入口より岐れて「弁慶岩」を過ぎ、峯に沿って登り「三角点」「城址」「観音像」へと至る道を改築して「芦山大廻遊道路」とする。そのほか、万代橋より近い公園の西側に「新公園入口」を設け、そこから「蛇谷」を越えて「城址」へ至る「歩道」を造成する。

②各部局の設備

この「設備」の内容は多様であり、見晴台広場、腰掛 (ベンチ)、養魚池、釣堀、天然植物園、果樹園、鹿園、夏期林間学校、パノラマ台、休憩所、飲食店、案内板などについて具体的に計画されている。この中から図面上で判明した幾つかの事例 (図5) を取り上げて紹介する。

神明神社の社叢 (モミ、カシ等) や保安林 (クスギ、アベマキ等) を「天然植物園」とする。

「鹿園」は、その周囲に高さ7尺の木柵を造り、その下半部は密にして犬の侵入を防ぐことが重要である。ここに牝鹿2、3頭、牡鹿1頭を放てば、牝鹿は年々1頭づつ仔鹿を産むであろう。冬期間は、小屋を造って避寒するようにする。

鹿園より谷沿いに現在スギ林のある一帯は、地形緩斜にして夏季は涼しい場所であるから、「夏期林間学校」の講義場となして使用すると良い。また夏季林間学校敷地の上方は、現在クリ林の一帯であることから「果樹園」

とする。そのほか、カキ、モモ、ナシ、ウメ等を植栽し、監督人を置いて訪問客に広く販売すると良い。

芦山公園で最も高い「三角点」の場所に、強風に耐える四阿を設置して「パノラマ台」とする。その天井には「パノラマ図」を描き、主要な地勢を図示し、自然地形の学習場とする。

公園内の適当な場所に無料の「休憩所」を設置し、さらに数カ所の「飲食店」を設ける。

北入口（神明神社側）と西入口（新公園入口）には「鳥瞰図式」の公園全体の「案内板」を掲げ、また公園内の適切な場所にも「案内板」を設置する。

③樹木の改良手入

現存するスギ、マツ、ヒノキ林は、経済林の育成を目的とした林業的扱いではなく、完全な人工林の森林美を発揮するように努めるとともに、また雑木林については、ヤマザクラやモミジ等を補植して不良雑木を除伐して、一大風致林の形成に向けて取り組むことが述べられている。

「天然植物園」の上方から「観音像」に向けてサクラを補植し、「サクラ山」となす。

最高地点の「三角点」を中心とした山脈通り一帯には、マツを補植して「マツ林」とする。

「弥次衛門山」を中心に「ツツジ岡」となし、さらにその南方を「ハギの名所」とする。

「観音像」付近には、ヤブツバキの原生が多く、これを利用して「ヤブツバキの名所」とする。

「果樹園」の下方部一帯に「梅林」を仕立てて、梅花鑑賞の地となす。

④大運動場

現在の武生町には、町民が利用できる「運動場」がないことを指摘し、その必要性を説いている。ただ村国山自体には適した地点がないことから、万代橋付近の日野川沿いを整備して「大運動場」と「水泳場」の設置を強く提案している。

乙、第二期の計画

第一期で計画した「歩道」を「自動車道」に改造し、興禅寺の下方で連結して「廻遊自動車道」とするなど、散策する歩道以上に自動車による園内の廻遊性を強調している。

結び

『設計図及説明書』の内容は、大方針を提示したに過ぎず、今後の現地施工に当たっては、いっそうの精緻な実施計画が必要であって、かかる創意を以て「自然美（森林美）」と「山岳・眺望・樹林」を特徴とした町唯一の公園で、広く町民に遊覧地として開かれた「芦山公園／森林公園」となるであろうと論究した。

5. おわりに ―総括と展望―

本稿では、日本近代公園のパイオニアとしれ知られた本多静六が、大正14年に作成した芦山公園の『設計図及説明書』に着目して、まず当時の武生町に芦山公園が設置されるまでの歴史的経緯やその設計者の本多について考察した上で、この『設計図及説明書』の内容の読解を行った。戦前の都市形成史において、近代都市に公園設置が不可欠であったことから、武生町の近代化を進めるために芦山公園の設置が着手され、著名な本多静六がその設計を担うことになったわけである。

この『設計図及説明書』から読み取れるのは、まず芦山公園が村国山の特徴（自然地勢、植生等）を最大限に活用して設計された森林公園であり、そのための豊かな森林美を育成する風致施業計画とともに、町民の近代生活のための公園設備計画が纏められていた。

以上の本稿での成果をもとに今後の研究課題を以下に2つ挙げて、本稿を終えることにしたい。

- (1) 森林公園として誕生した芦山公園は、戦後に都市公園として再整備されて現在に至るが、その間の歴史的変遷に着目し、本多の設計案の今日的検証を行う。
- (2) 福井県近代公園史に芦山公園を位置づけるため、明治期の足羽山公園（福井市）や西山公園（鯖江市）等との比較検討を北陸や全国の動向にも配慮しながら考察する。

註

- (1) 日本近代都市公園史に関する主な先行研究は、以下の通りである。
田中正大（1974）『日本の公園』（SD選書）鹿島出版会
丸山 宏（1994）『近代日本公園史の研究』思文閣出版
白幡洋三郎（1995）『近代都市公園史の研究』思文閣出版
- (2) 福井県内の近代公園史に関する拙稿は、以下の通りである。
市川秀和（1999）「足羽山公園の成立と場所の政治学 福井市における近代公共空間の形成に関する一考察」
福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 第6号
市川秀和（2000）「軍都の再生から公園の再生へ 鯖江市における近代公共空間の形成に関する一考察」
福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 第7号
市川秀和（2014）「福井県の近代公園の成立について 足羽山公園と西山公園」
『北陸信越地方の歴史的建造物 地域文化財の調査研究と保存活用』日本建築学会北陸支部
- (3) 東京都公園協会の所蔵する「長岡安平史料群」の目録と図面集が、以下の通り刊行されている。
『長岡安平の残した設計図 わが国ランドスケープの嚆矢』（2015）東京都公園協会
- (4) 本多静六の設計図及説明書では「廬山公園」と表記されているが、当時から「芦山公園」が使用されており、現在まで親しまれていることから、本稿の表題と本文中では「芦山公園」の表記で統一する。
- (5) 武生の近代史に関しては、以下の文献を主に参照した。
齋藤嘉造（1963）『たけふ 歴史と伝説を尋ねて』武生高校社会科研究会
『武生市史 概説編』（1976）武生市役所
- (6) 遠山 益（2018）『本多静六 ―緑豊かな社会づくりのパイオニア』さきたま出版会

図版出典

- 図1 遠山 益（2018）『本多静六 ―緑豊かな社会づくりのパイオニア』さきたま出版会
図2 浦崎真一（2017）『長崎偉人伝 長岡安平』長崎文献社
図3 『特別展 絵図をよむ 描かれた越前市』（2011）越前市武生公会堂記念館
図4 本多静六（1925）『福井縣武生廬山公園 設計図及説明書』福井工業大学市川研究室 所蔵

（2020年9月10日受理）